

研究成果報告書

2023年08月24日

1. 所属・職・氏名 等

文学部 国文学科 早野慎吾

2. 研究課題（テーマ）名

マンガを活用した言語教育（特に国語教育）

Research on Language Education Using Manga/Animation

: Particularly in Japanese Language Education

3. 研究期間

2022.04～2023.03

4. 利用した研究費の種類及び金額

大学院共同研究費交付金 230,000 円

5. 研究の概要

はじめに

2023年度の大学院文学研究科国文学専攻「日本語学研究Ⅱ」では、4名の大学院生が受講しており、全員がマンガ（コミック・アニメーション）に関心が高く、筆者が研究テーマの一つとしているマンガを活用した言語教育に高い関心を示した。そこで、実施したのが本研究である。

筆者は、早野他（2018a）・早野他（2018b）・早野（2019a）・早野（2019b）・早野（2020）などにおいてマンガを活用した言語教育に関する研究報告を行ってきた。特に小学校児童への国語教育を扱った早野（2018a, 2018b）において、児童に関心の高いコミックを使うと高い教育効果が得られることを証明した。本研究では、これまでの成果を活かす形で言語教育におけるコミック活用法を分析した。

研究目的・方法

対象とするマンガは『ジョジョの奇妙な冒険』（荒木飛呂彦）である。本作品は、2006年の文化庁メディア芸術祭10周年記念の「日本のメディア芸術100選」マンガ部門で2位に選ばれている。また、英語版のみならず、Le bizzarre aventure di Jojo（イタリア）やJOJO 冒険野郎（台湾）のように多くの言語に翻訳されていることもあり、世界で高評価を受けている。また、コミック、アニメ、実写、小説のコンテンツがそろっており、コンテンツの違いによる表現効果を分析するのに適している。ここでは、特にコンテンツがそろっている岸辺露伴のエピソード（『ジョジョの奇妙な冒険：ダイヤモンドは砕けない』『岸辺露伴は動かない』『岸辺露伴は叫ばない』等）に限定して調査を行った。方法論としては、各コンテンツで表現方法（台詞・カット・効果音等）がどのように異なるかを分析し、以下の3点を目的に遂行していく。

- (1) コンテンツの特徴
- (2) 表現方法の違いによる効果

(3) 国語教育への応用

霊波紋(スタンド)の扱い

『ジョジョの奇妙な冒険』の第3部「スターダストクルセイダース」編より、霊波紋(スタンド)と呼ばれる特殊能力を使う者同士のバトルを中心にストーリーが展開する。本研究では、特に霊波紋の表現方法を中心に各コンテンツの違いによる表現効果を分析する。

岸辺露伴主人公の実写版『岸辺露伴は動かない』(NHK)においては、原作コミックを知らないという全容の把握が難しい霊波紋の表現がドラマ全8話通して削除されている。岸辺露伴の霊波紋であるヘブンズ・ドアーは「相手を本にして生い立ちや秘密を読み、指示を書き込むこともできる特殊能力」(NHK公式サイト)として設定が変更されている。原作コミックに忠実に実写化するには、映画版『ダイヤモンドは砕けない:第一章』(2017.08.04)のようにCG等の技術を用いた表現方法もあった。しかし、原作コミックやアニメとある程度の距離を置くことを意識し、あえて再構成して制作されたのではないかと考えられる。

霊波紋がない実写版では、相手の顔の前に手をかざし「ヘブンズ・ドアー」と露伴が発することで、特殊能力が発動される。限られた時間の中で早急さを要する場面(例:第1話「富豪村」にて、飼い犬と太郎の命を奪われ慌てて屋敷を出ようとする泉京香に、これ以上マナー違反を犯すことのできないようにするシーン)などでは、掛け声を発しないこともあるが露伴が能力を発動したことは視聴者に伝わる。また、掛け声や動作に統一がないことで、自身の特殊能力を長年使い慣れた力として、より自然に発動させているように見せる効果もある。

「実写>アニメ>コミック>小説」の順に情報量が増えていき、またリアリティも増す。霊波紋のような非現実的な現象は、アニメまでなら自然に受け入れられるが、映画版のCGによる霊波紋では、かなりの違和感があった。実写版では特殊能力という曖昧な設定となっているが、岸辺露伴は自らの連載漫画の取材のため、奇妙な出来事へ積極的に関わりを持つ。これは、特殊能力者の岸辺露伴以外には気付きようのないほどの些細な違和感が、ドラマの中のリアルな日常に溶け込んでいると言える。実写版では、原作コミックのように現実では起こり得ない二次元的な描写はないが、そのストーリーの設定には常にリアリティを含んでいる。このリアリティこそが実写版の特徴とも言える。

2022年度は、各コンテンツの特徴を分析したが、2023年度は、このコンテンツの違いをどのように言語教育に活かすかを考察していく。なお、2022年度の研究においては大友美侑(大学院2年)、HAU ZHOULIANG(大学院2年)が中心に行い、2023年度も継続中である。

6. 研究成果等

本研究は、継続中で本学研究紀要もしくは大学院紀要に投稿する予定である。

7. 研究の実績(論文・発表等)

本研究は、継続中で本学研究紀要もしくは大学院紀要に投稿する予定である。また、日本マンガ学会もしくは全国大学国語教育学会での発表も視野に入れている。